

登録有形文化財

畑田家住宅活用保存会年報

No.12 / 2013



<畑田家住宅活用保存会 2013 年度行事予定>

初夏の一般公開と第 16 回畑田塾 2013 年 5 月 12 日

「宇宙で一番低い温度を作る」 帝塚山学院学院長・元大阪市立大学学長 児玉 隆夫

秋の一般公開と第 17 回畑田塾 2013 年 12 月 1 日

「わら草履作りを楽しもう」

畑田家住宅活用保存会 畑田 庸雄、畑田 稔、畑田 拓男

春の一般公開と科学フォーラム 2014 年 3 月 16 日

「太陽光発電の現状と未来」 大阪大学産業科学研究所教授 小林 光

初夏の一般公開と医学フォーラム 2014 年 5 月 18 日

「皮膚の健康を考える」 北村皮膚科医院副院長 北村 公一

ぬくもりのある集い

会長 中村貞夫

羽曳野市の畑田家住宅は平成 11 年に国の登録有形文化財に選ばれました。それを機に当主の畑田耕一氏を中心にして、小・中学生を対象に教育・文化活動を行う畑田塾が発足しました。

初回には元大阪大学総長の故金森順次郎先生と作家の筒井康隆氏をお招きし、また、ノーベル賞受賞者の白川英樹先生はじめ、これまでにお願ひした講師のお顔ぶれは多彩を極めています。

一般公開やフォーラムに参加された方々から、人と建物の調和が醸し出すぬくもりを指摘して下さることが多いのは嬉しいことです。少子化など社会状況の変化の中で、出席者の年齢層が中・高年に移り、活動のビジョンをどのように据えていくのか問題も多いのですが、畑田家住宅活用保存会の会員の皆様の深いご理解と羽曳野市の熱心なご支援のお陰で活発な活動を続けています。

この度、初代会長の畑田勇氏が相談役に引かれました。長年にわたるご尽力を深く感謝いたします。

畑田耕一氏と小生は義理の兄弟です。ご縁があって、この住宅に住まわせていただき、子育てをしました。画家である私は納屋をアトリエにして、絵を描き続けています。或る時、英国人の画家が来宅して、私の絵がこの住宅のように、緩やかな波長で制作されていると言ってくれたことがあります。地区の方々からも、仲間として少しずつ認めて頂けるようになったかと感じています。

微力な小生ですが、保存会の役員、スタッフの皆様を支えられて、これまでの路線を継承、深化させていき

いと希っています。

今回から表紙を畑田氏の写真が飾ります。ご期待ください。



<表紙写真>畑田家の大戸口（表玄関）です。昔はこの重い障子をガラッと開けて客が来ました。大きなコロが付いているので動かすと独特の音がします。客人と家人をつなぐ音でもあります。以前に筆者の大学の研究室のドアを「ガラリ」と言いながら開けて入って来る人がいたのを思い出します。手前に写っている格子戸（簀戸*）は隣の土間との間の中戸、その土間の後ろに背戸（裏木戸）があります。（畑田耕一）

*図説木造建築事典 基礎編 158 頁 木造建築研究フォーラム編、学芸出版社

平成 24 年度 事業報告

1. 春の一般公開と医学フォーラム 5月13日
「いのちの不思議」
元大阪大学総長・大阪大学名誉教授 岸本忠三
2. 秋の一般公開と衣育フォーラム 11月18日
「人はなぜ服を着るのか」
大阪大学文学研究科教授 武田佐知子
3. 春の一般公開と経済フォーラム 3月24日
「先人に学び、未来を語ろう」
大阪大学経済学研究科教授 堂目卓生
4. 出版
「超高齢少子化社会を如何に生きるか—医療と教育の両面から考える」(出版シリーズ No. 10)
医療法人はただ診療所前理事長 畑田耕司
大阪大学名誉教授 畑田耕一
5. 畑田家当主 畑田耕一による出前授業
4月24日 西宮市立西宮高等学校
5月14日 豊中市立西丘小学校
5月23日 豊中市立南丘小学校
6月13日 豊中市立南丘小学校
2月12日 豊中市立寺内小学校

役員

相談役	畑田 勇
会長	中村貞夫
副会長	甲斐学、畑田拓男、
事務局長	畑田耕一
幹事	石井智子、奥田 寛、織川久子、 笠井敏光、北山辰樹、畑田達也、 畑田弘美、矢野富美子
会計	畑田庸雄
会計監査	澤田秀雄、塚本昭光

新正会員

北村公一	天王寺谷亨	松本 昭	濱田篤司
------	-------	------	------

新特別会員

岸本忠三	武田佐知子	堂目卓生
------	-------	------

本年の行事に参加していただいた方々からの感想文
第15回畑田塾 2012年3月25日

「オルゴールを科学する」

畑田家当主・大阪大学名誉教授 畑田耕一

「いろんな音でリズム遊び」

関西二期会・相愛大学講師 畑田弘美

◆畑田家のフォーラムや塾には、鷲田先生の哲学の話、蜘蛛の糸の話など3、4回は参加したと思います。長い梯子で母屋の屋根裏に上がらせていただいたことも、神秘的な空間で60歳を過ぎたおやじが、わくわくしたことを思い出しました。今回は畑田先生の数々のオルゴールを聞かせていただき、音色、仕掛け、また音域のすごさの説明に感動しました。何も知らなかったです。孫二人と楽しい時間を共有出来たことに感謝しています。孫の感想ですが、上の男の子が七歳、下の女の子が四歳、何が一番良かったと聞きますと、オルゴールと一言、昼の弁当とは言わなかったので連れて行った甲斐がありました。履物を揃えていただいた人が大学の教授、庭で話しかけた人が有名な画伯、屋敷の広さ以上に驚きました。

(八尾市 海堀清孝・一翔・風花)

◆会場には大小様々なオルゴールが展示され、オルゴールの説明は当主の畑田耕一先生が担当、オルゴールの由来、音の発生のメカニズム、広域なオルゴールの振動数は聞く人の心を癒し、各種の症状、特に睡眠の促進や免疫力の増進、血流が良くなる等、音の趣向と共に医学的な利用の開発も進んでいるとの事でした。また、サンドブラストに依る移りゆく四季の自然をランプに表現した被せガラスの造形芸術作品をロンドンでの世界芸術競技にも出展された奥様の畑田美智子様朗読風に説明され、作品の情景に合わせたオルゴールの音楽を畑田先生が添え、最後の作品は満天の星をイメージしたランプの筐に無数の星が描き出されました。オルゴールからは「見上げてごらん夜の星を」の曲が流れ、参加者全員の合唱に包まれ、120年を超えた畑田家の時空を超えて芸術劇場さながらの空間が広がりました。

午後からのリズム体操はマリンバの演奏を楽しみ、音楽の三要素、メロディ・リズム・ハーモニーの話聞き、色々な打楽器を手に取り奏でながら楽しみました。一緒に参加した孫(4才10ヶ月)には少し難しかった様でしたが、手に取ると小さなオルゴールの音が、共鳴箱の上では大きな音になったり、腰を掛けると音が出るオルゴール等「マジックみたい」と興味を示し、色々な楽器に触れられたことは楽しかった様でした。楽しい一日を有難うございました。

(大阪市 三木 優)

◆今回畑田塾に参加させていただき、オルゴールの奥深さや、色々な打楽器を使って、音楽の三要素のリズム、メロディー、ハーモニーを一度に楽しめるという事を学ばせていただきました。その中でも印象深かったのは、オルゴールと木との関連性です。オルゴールを木に共鳴させる事によって、更に繊細な音や、優しい音色を響かせられることを知り、いかに共鳴が大切かということを知りました。今回学んだ事を今後の音楽活動に役立てていきたいと思えます。(片木彩賀・高校3年生)

◆私が一番印象的だったのは、畑田先生と奥様がコラボレーションされた、オルゴールを聴きながらのランプ紹介でした。ランプがかもし出す雰囲気や空間、温かみのある明るさを引き出すかのような選曲がなされ、オルゴールが楽しげに鳴り響く、すばらしい共演だったと思います。奥様のランプ紹介では情景が目浮かぶような素敵な詩が詠まれ、私もその世界にのめり込みました。不思議だったのは、オルゴールのアルファ波が出る椅子です。座ってみると非常にリラックスでき、いつまでもここにいたい気分になりました。(池田市 近藤詠里加)

◆先日の畑田塾はとても良かったです。免疫力が上がるというオルゴールを聞いて、私の免疫力もアップしているように感じました。そして、オルゴールの効果でしょうか、その晩久しぶりにぐっすり眠れました。不思議です。ガラスアートの幻想的な美しさも共鳴していたと思います。百二十年を経た木造家屋の木や土壁、お庭の佇まいも私を落ち着いた気持ちにさせてくれました。マリンバの演奏をこんなに間近で見聞きするのも初めてでした。本当に楽しく素晴らしい一日でした。有難うございました。

(箕面市 浦野民子)

◆音楽大学打楽器科専攻の若い学生さんが、今回の先生。打楽器についての授業を受けました。この大きなマリンバをどうやってここまで運んできたかの三択クイズで始まった授業は引き込まれる授業でした。準備された打楽器類は、マリンバ、ドラム、そしてほとんどが初めて目にする小道具的な打楽器で、その中には赤ちゃんのあやし具や釘で音を出すものまでありました。子供も大人も興味津々で、これらに皆が直接触って音を出してみる機会もありました。アフリカ起源と云われる打楽器類、中でも、日本で改良が進んだマリンバ、間近で聴く5オクターブのマリンバは、古い日本家屋の畑田家母屋でいろいろなリズムと音色を奏でてくれました。100年以上いろいろな音を聴いてきた家屋も、「剣の舞」の生演奏には吃驚したことでしょう。演奏者親子に拍手喝采で

す。畑田塾への参加は今回が初めて。午前中のオルゴールについての授業は受けられなかったが、当主みずからの白熱授業に湧いたことと思います。今回が15回目の畑田塾開催の由、よく続けてこられたと思う。区切りの良いところで記念パーティーでも催したいところだろうが、このような団体は、通常は財政困難のはず。旧庄屋敷全体の維持、そして会の運営や講師への謝礼等やりくりが大変だと思います。また、理念とされる教育改革については、門外漢で十分理解できていないが、この親子で参加する寺子屋形式を少しでも続けられ、インターネットで内容を公開し続けて、共鳴者を増やしていられることを願う次第であります。当主をはじめ保存会のみなさんの熱意と努力に拍手喝采。(埼玉県 戸田誠)

医学フォーラム 2012年5月13日

「いのちの不思議」

元大阪大学総長・大阪大学名誉教授 岸本忠三

◆歳とともに自然の法則の偉大さを強く感じるようになっていっていますが、5月13日の岸本忠三先生の「いのちの不思議」のお話まさにそうでした。私には理解の難しいところも多々ありましたが、遺伝の本体はDNAであり、その糸の構造は4種の塩基、A、T、G、Cからなること、もし、これ以上複雑だと沢山故障が起こるからであり、また、男の方が弱くできているため、神は男女を1.05対1.00の割合で男を多く生むように人を作ったなどは、自然の法則の偉大さ以外の何ものでもないと学ばせていただきました。同時に、現代の科学の進歩は、その自然の法則(=神の摂理)の領域に土足で踏み込みつつあるのではないかとの恐れを抱きました。

近代医学は感染症対策の目覚ましい発達により、日本においてはこの100年間で、「いのち」を2倍まで延ばすという快挙を成し遂げました。これは大変喜ばしいことですが、その反面、「オスとメスが掛け合わされなければ子供ができない大原則」が、クローン羊の誕生で崩れ、男女を生み分けたり、頭の良い人だけを生むことも可能になったなどは、土足で踏み込む類ではないでしょうか。

岸本先生は、「知識と知恵の融合が大事である」を話しの締めくくりとされました。私達は知識に負けない知恵を培い、働かさねばならないということでしょう。それはもう道德の問題、さもなければ自然からの大きな罰が下るかも知れません。

(八尾ニューモラル生涯学習クラブ 池上和彦)

◆なんとも難しそうなテーマだけど、どこかおもしろそうと思って参加しました。岸本・畑田両先生は、

学者さんの怖いイメージもなく親しく耳を傾けることができました。お話を聞いていて、以前に読んだ考古学者の小説で疑問になっていたことが思い出されました。それは、すでに滅んだ一族のある知識が代々遺伝しているというものです。記憶が遺伝子の中に組み込まれるものなのか、それとも絶滅したその種族の頭蓋骨から記憶をつかさどる大脳を考古学者は想像したのでしょうか。

生きものの進化は、環境や遭遇したことから「いのち」をつなぐために種々の工夫を凝らしてきたことによることが多いでしょうね。すると、大脳の奥深くにしみついた記憶も遺伝要素となっているのかも知れないですね。現代人にも、原始的潜在能力の発現として「夢」の一部や、何かを予知することなど、遠い祖先の記憶が作用しているのかも知れません。そんなことを考えると、「いのち」のつながりの中で、人類だけでない生命体への責任が、進化の最先端をいく人類の責務のように思われました。いろんな想像をさせていただけたこと、両先生に感謝しております。(主婦 安見雅子)

◆まずは畑田家住宅についてですが、明治時代の屋敷構えの趣きを良く残しているとのことですが、一番感心したのは建物の随所に庄屋農家としての生活の知恵が活かされていることです。現代の住宅の方が建築技術は格段に進歩していると思いますが、その知恵と工夫は畑田家住宅の方が格段に活かされていると痛感しました。見学後持参した弁当を軒先で食べながらお庭を拝見していましたが、日頃現代住宅に住んでいては味わえない趣を体感できて、このような住宅を後世まで伝える意義の大きさが納得できた次第です。

岸本忠三先生の「いのちの不思議」のお話しは、医学的素養の無い私にとっては大変難解な内容でしたが、特に印象に残ったことは、「いのちに関する我々の知識は幾何級数的に増加するが、それを扱う我々の知恵はそれに追いつかない、知識と知恵を如何にうまく融合させるかが、いのちの科学に最も求められる課題である」とのコメントでした。しかもこのお話が正式の講演会場ではなく、畑田家住宅で行われたため、柔らかい雰囲気の中、先生のかんりの本音のお話が聞けたことです。私はたまたまABCテレビの人気番組の「相棒」最終回で、クローン研究学者の母親が、主人と子供を交通事故死させて悲嘆に暮れている娘のたつての願いを聞き入れて、母親の孫にあたる死んだ子供の細胞を娘の体内に移植してクローン人間を妊娠⇒誕生させようとして、それを察知した警察等との確執が起こる話を見ました。

最終的にはその子供は流産に終わってクローン人間誕生は阻止できましたが、これは作り話とはいえ、知識と知恵についての悪用の一例と言えます。やはり医学的に高度な知識は知恵によって倫理に触れないように正しく制御・管理・活用されないと大変な事態になる可能性があるということだと思います。

私は社会保険労務士として社会保険の立場から健康問題に一定の係わりを持ちますので、このことについて今後も関心を持ち続け、自分なりの見識を高めたいと思います。今後も時間が許す限り、畑田家住宅訪問および畑田塾・フォーラムに積極的に参加したいと考える次第です。（豊中市 徳永金三郎）

◆日本は今、少子高齢化で人口減少期に入りました。政府は少子化対策大臣を任命しバラマキ政策で少子化に歯止めを打とうとしています。しかし、それは自然の摂理に反する愚かな政策です。経済が豊かになれば子供を産み、貧しくなれば子どもを産まないというものではありません。最貧国が人口爆発をし、富裕国が減少傾向にあるのが実態であることをみても明らかです。

岸本先生のお話しにもあったように、日本の20世紀の100年は医学の進歩により、平均寿命を40歳代から80歳代までに延ばしました。今や高血圧、糖尿病、高コレステロール血症等の生活習慣病はほぼ完全に制御されるようになりまし、ワクチンと抗生物質は感染症をコントロールし、乳幼児死亡や高齢者の肺炎を激減させました。ヒトの遺伝情報30億個のDNAの配列も読み解かれました。どんな組織、臓器にも分化できる細胞も作られるようになっています。そのことにより、日本の人口は3000万台から1億2000万台、なんと100年で4倍に伸展しました。しかし、政府の統計予測によると今後の100年で4分の一にまで人口減少するといわれています。この予測はほぼ現実となることでしょう。今後も医学は進歩を続け、遺伝子や細胞の改変にまで繋がる可能性もありますが、この辺で、神の領域まで人間が踏み込んでいいのかどうかを考えなければなりません。倫理観が問われているのです。これからの時代は、知識より知恵を重視することが本当に大事だと気づかされました。「いのちとは何?」、「人はなぜ生かされているのだろうか?」、「人が生きることの使命とは?」等々・・・いろいろと考えさせられる講演でした。岸本先生から、「自然の摂理のもと全ては循環しなければならない。循環することこそが永遠の繁栄と幸福をもたらす」という強いメッセージをいただいたような気がします。感謝。

（オフィスヨシオカ株式会社 吉岡政彦）

◆去る5月13日初めて畑田家住宅を訪問させていただきました。明治時代を彷彿とさせる畳敷きの日本間で世界的な医学者岸本忠光先生のお話しを拝聴するという一見ミスマッチとも思える情景が、むしろ古代文化が栄えた南河内の草の根の文化の息づかいを感じさせてくれました。畑田家住宅は今後も羽曳野の、南河内の文化の発信地の一つとして大切に保存されなければならないと思います。

（羽曳野市駒ヶ谷 真銅忠光）

衣育フォーラム 2012年11月18日

「ヒトはなぜ服を着るのか」

大阪大学文学研究科教授 武田佐知子

◆タイトルには些か驚かされました。畑田家に向かう途中、多分このタイトルを切り口に哲学的なお話になるのではないかと想像し、若し、この質問を受けたら、「人間は恥を知る生きものだから」であると答えようと考えていました。それは、恥を知るのは人間以外にはないと想像するからです。

講演の要旨を頂いたら、「ズボンとスカートの歴史学」となっており、正真正銘の服飾のお話で、しかも冒頭に、講師の武田佐知子氏より「人が服を着るようになったのは、「恥を知るから」が一つの説としてであると話されてしまいました。

私は、正倉院展へ最終の11月12日に行き、「瑠璃杯」や「蜜陀彩絵箱」の様な豪華な宝物に混じり、展示されている下級官僚の官服をみて、良くぞこの様なものが1300年も保管されてきたものだなあと感心し、友達と眺めていたのですが、1週間後に正にそのお話が出て来た事で、その繋がりがとても嬉しかったです。

講義を聞いて、世界には言語も、価値観も、肌の色も違う多くの民族があるにも係わらず、大きな流れとして、男性はズボン、女性はスカートとなり、その一つの要素が「家父長権」であるというのが面白いと思いました。これを性差というべきなのか、それとも男女の役割からというべきなのでしょう。そして、日本の今を眺めて、「移れば変わる」をつくづくと感じた次第です。

（八尾ニューモラル生涯学習クラブ 池上和彦）

◆武田先生の講演の内容はもちろん興味深く、面白いと思いましたが、それより、“人はなぜ衣服を着るのか”のような当たり前の質問に対して、我々にもう一度科学的かつ弁証的に考えさせるという意味で、今日の講演はすごく啓発的だったと思っています。

歴史は私の専門ではないので、深く研究したことがないですが、興味がないわけではありません。今日のお話しを聞いて、初めて服装と意識との関係に

ついて認識しました。また服装からその時代の民俗や身分などの情報を読み取れることを知り、大変勉強になりました。物事を見る時に、角度を変えれば新しいアイデアが生まれる可能性があり、固定観念に頼らず、いろいろな発想を持つことで自分が成長できると実感しました。

(大阪大学国際公共政策研究科留学生 Bin Ni)

◆人はなぜ服を着るのか、身体加工を含めて考えれば「服を着ているのが人間である」、「人間存在の指標である」と武田先生は言われました。あまりに日常的で、身近なものである服について考えることは、そのまま人間について考えることにつながります。畑田家のフォーラムはどのようなテーマでも、その感があります、今回は特にそう思いました。

2本の足をどう包むかでズボンとスカートに分類する大胆さには心地よさを感じます。ヨーロッパにおいては、ズボンが自由の象徴であり、馬に乗れることから武器獲得のイメージとなり、さらに家父長権のシンボルにもつながるとのことでした。そのズボンは男性が占有し、女性はスカートにとり残されたというのです。武田先生も研究を進めていくにあたって女性であるが故の御苦勞をバネとして努力されたことが話の中に度々出てきました。それが研究成果からも伺われ、エールを送りたいと思います。特に魏志倭人伝のみにとらわれることなくその周辺を深く研究されたこと、そして正倉院「計帳」に記載された「黒子」の部位に目をつけられたことには発想の豊かさを感じました。日本においては大きく見ればスカートの歴史であり、ズボンは明治以降であり、庶民の服装において性差の少ないのが特徴で、ヨーロッパとは趣が異なると伺いました。

近代ではスカートなどむしろ女性らしさの武器として発展してきている側面もあるように思いますが、これはファッションの問題でしょうか。

いずれにしても、服装が個人の心と深くかかわるとともに社会の仕組みの反映でもあることに気づかせていただいた充実した秋の1日でした。感謝。

(八尾ニューモラル生涯学習クラブ 神野武男)

◆今回のお話を伺って、服は機能的な側面と象徴的な側面、社会的な側面があるということを理解できました。

機能的な側面としては、田植えのための膝丈の服や、乗馬のために発明されたズボンなどのお話がありました。私の知っている例としては、日本の戦国時代に武士が刀を抜く際、邪魔にならないように着物は左が前であったことが挙げられます。また、洋服においても中世ヨーロッパで貴族の男性は自分で

服を着脱していたため、右利きの人がボタンを止めやすいように、シャツは左が前でボタンがある右が下になっていたそうです。一方、貴族の女性は、召使が服を着せていたため、右利きの人が向かい合って着せやすいように男性のシャツとボタンが反対についていました。必要は発明の母と言われますが、服の歴史においても、ニーズにあったものが生まれ、人々に使われてきたと考えられます。

次に象徴的な側面としては、ズボンが家父長制の象徴であるため、女性がズボンをはくことが禁止されていたというお話に興味をひかれました。現在の日本では女性がスカートをはくかズボンをはくかについて問題になることはあまりありませんが、欧米社会では服の象徴的な側面を重要視する考えが今でも残っていると思います。私がアメリカに留学していた頃、このことを実感する経験がいくつかありました。例えば、普段学校にはジーンズで通っている若い女性でも、週末にパーティー等でお洒落をして出かけるとなると、ドレスコードがなくても、自由の国とは思えないほど皆が同じような服装なのです。週末に飲みに出かけても、ズボンをはいている若い女性はほとんどおらず、皆がワンピースにハイヒールを履いていました。アメリカ社会では日本社会以上に、女らしさ、男らしさを求められるのです。

社会的な側面としては、現在は男性と女性で服装が異なっていますが、古代の日本の庶民は男女の服装の違いがほとんど無かったというお話がありました。歴史上、男尊女卑の社会において、政治、戦争、労働などを男性が行い、家事、育児を女性が行ってきたため、男は外へ、女は内へという考え方が男女の服装の違いを生み出したと考えられます。男女とも田植えをしていけば自然と同じような服装になるが、男女の役割が分担されるにつれて、服装に違いが出てきたと考えられます。男性は、制服や作業着等の動き易い服装が多かったが、女性の服装は動きにくいものが多かったのです。中世ヨーロッパのドレス、日本の着物等の例が挙げられます。男性が女性を家に留め、女性が簡単に遠くに行ったりできないように“女性らしい”服装で行動を制限したと考えられます。歴史から服装を知るだけでなく、逆に当時の服装から当時の生活や文化・風習を調べてみると興味深いのではないかと思います。

(西宮市 石井治樹)

春の一般公開と経済フォーラム 2013年3月24日
「先人に学び、未来を語ろう」

大阪大学経済学研究科教授 堂目 卓生

この行事の感想文は編集の都合上、次の年報に掲載します。

生活におけるデザインの大切さ

畑田家住宅活用保存会幹事・一級建築士 石井智子

先日、登録文化財登録の申請書を作成するために河内松原にある旧家を訪れました。門を入った途端、その景観の見事さに驚嘆しました。無名の建物の中にもこういうすばらしいものもあるのだとわかり、うれしくなりました。

江戸時代の主屋は、一部を残して建て替えられていましたが、増築部分の明治の書院は美しく、座敷まわりに設けられた隅々まで手入れの行き届いた庭と相まってすばらしい空間を作っています。ご当主のお祖父様が出来上りの期限を設けず、金額にも制限を設けず作られたそうです。そしてこのような建物と庭を美しく保つために長年手入れをしてこられた当主の存在を心強く感じました。建物についての教養が社会においてもっと価値をおかれるようにならなければ、すばらしい建物をつくり、それが生きるよう維持をしていくということがなされなくなってくると思います。

近年建物に財をつぎ込む人は極端に減っているようです。富は社会に平等に分配されるべきかもしれませんが、持てる人がすばらしい建築をつくるためにその財をつぎ込むことは、文化に寄与するという意味でとても大切なことだと思います。そうでなければ、その時代の名建築は作られないからです。建物を考えた人の技量、職人の技、今では手に入らない材料など、建築はその時代の文化を目に見える形に具現化したものであり、人がその中に入って歴史を体感できるものです。また、建物だけがよければ良いというものでもなく、部屋がどのように外部と繋がり、その外部はどのような空間であるかということも建物の質を決める一要素です。建物を建てる人それぞれが、建物と庭などのその周りの外部空間を良いものにすれば、町並みも良くなっていきます。建物と同時に家の周りの空間も含めて設計することは、室内空間の質を高め、同時に外部空間の質も高めます。

家政学、今の生活学というと、科学・技術の研究に比べて一段低い学問だと思われがちですが、今の時代、いかに生活をデザインするかを研究する生活学は、大事な学問であると考えています。どのような衣類を身につけ、どのようなものを食べるか、どのような空間で暮らすかということは、その人の哲学に関わる重要な問題だと認識する必要があります。人それぞれが、生活を質の高いものにするにはどうすべきかということをもっと考えるべきだと思います。そうした場合、その人の内面にまで知らないうちに影響を与える住空間にも関心を払う必要があります。

今から30年ほど前にドイツでは景観を壊す建物ができるのと市民の力で潰してもらうことができると聞きました。そのとき将来日本もそのようになるのかと期待を持ったことを覚えています。しかし、現代においても日本はそのようにはなりません。外観、室内ともに工場生産品に覆われた建物の中で、昼間でもブラインドを下ろし、窓を開けることもなく一日を過ごす人達の感性はどのようなことになるのでしょうか。幼い頃、身の回りに瓦屋根と漆喰壁の家があった時代を生きた人間は手作りや自然に価値をおきますが、今では少数派です。手作りや自然ということから遠く離れた人間がつくる社会はどんな方向へ行くのでしょうか。

構造を形作る柱や梁が見え、室内空間に変化があり、全てに自然の材料が用いられ、その時代の職人達が腕を競って作った建物とそれを引き立てる庭を持つ歴史のある建物が1軒でも多く残り、またこのようなコンセプトで作られた新しい建物が1軒でも多く作られるよう私は活動を続けたいと思います。

写真は伊賀に建つ住宅で、159 m² (48 坪) の敷地に延床面積が126 m² (38 坪) です。敷地周りは眺望が開けていないため、前庭と中庭を設けて樹木を植え、中庭を中心とした生活を提案しました。玄関、主寝室の平屋棟と居間、食堂、子供室棟が中庭を通るガラスの廊下でつながっています。柱や梁などの構造材と食卓はご先祖から伝わる山の檜、松、杉を天然乾燥させて用いました。



撮影：東出写真事務所

時は流れても



畑田家住宅活用保存会相談役・前会長 畑田 勇

いろいろな面で前途多難が予想されるこの頃ですが、皆様方お元気でしょうか。政界、財界は全く沈滞して生気なく、国内景気は冷えきったままで、国民は四苦八苦の毎日を余儀なくされた生活をしている現状は、誠に哀れと申さねばなりません。

一昔前「所得倍增論」が叫ばれ、計画実行されたことがありました。これで活力を生みだした国民は、勇敢に前進して景気を回復し、豊かな裕福な生活を楽しむことができるようになりました。その後順調に進むべき予想に反して、世界情勢の変化にも影響され、舵取りを少し誤ったために何時の間にか豊かさもなくなり、安定感、安心感も失われてしまいました。誠に残念なことだと思われま。

昭和始めの頃や、終戦後間もない混乱期には暗中模索の時代が続きました。その頃、旧制高校生達がよく歌っていた歌がありました。「昭和維新の歌」(作詞・作曲 三上卓)と呼んでいましたが、それを思い出します。若者達は熱気を込めて、この歌を絶唱していました。右はその第1番の歌詞です。

汨羅(べきら)の淵に波騒ぎ
巫山の雲は乱れ飛ぶ
混濁の世に我れ立てば
義憤に燃えて血潮湧く

最近では、円高等のため国内景気が思わしくなく、消費環境も悪くなったので、企業は無理して生産拠点を海外に移し、経営の合理化・実収入の向上を計ろうとしています。これは国民経済にとっては、雇用の悪化、国民収入の減少、購買力の圧迫等を招き、景気は益々悪くなるのではなからうかと心配しています。これら企業の経営合理化の実績を、国内経済の再建発展に寄与してもらう訳には行かないのでしょうか。

時は流れ世情が変化すると、人々の心も大きく影響をうけます。しかし一方、古来人々が一所懸命に創造し、育み守ってきた素晴らしい実績が数々あります。日常生活に直接関係するものをはじめ、文化的な事象等多くの事柄や世界に冠たる文化的遺産があります。これらの素晴らしい成果は注意して利用し活用しながら末長く保存しなければなりません。現代に生きる者にとっての義務であり責任であります。

平成24年4月1日から平成25年3月31日までの収支決算^{*1}

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	66,746	講師謝礼	115,000
会費	561,000	資料・年報・出版作成費	346,080
寄付金・協力金 ^{*2}	9,000	通信費(郵送料、振替手数料等)	61,241
雑収入	9,000	事務用品費	6,977
合計	645,746	雑費	55,060
		別途積立金	50,000
		次年度繰越金	11,388
		合計	645,746
別途積立金 ^{*3} 合計	250,000		

^{*1} 会則第6条の規定に基づき、平成24年度の収入及び支出に関し、決算並びに関係書類を厳正に監査した結果、いずれも適正かつ正確に処理されていることを認めます。平成25年3月31日 会計監査 澤田秀雄◎ 塚本昭光◎

^{*2} 神野武男氏より御寄附を頂きました。感謝申し上げます。

^{*3} 当会では、ホームページに掲載している論文、随筆の中のいくつかをまとめて、会の活動の成果を示す書籍として出版する予定です。この積立金は、そのための資金に当てつもりです。

事務局 〒583-0874 大阪府羽曳野市郡戸471 畑田庸雄 電話072-762-7495

E-mail hatada@wombat.zaq.ne.jp

畑田家住宅活用保存会ホームページ <http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/>

会費の納入は郵便振替(口座番号 00980-2-41107 加入者名: 畑田家住宅活用保存会)へお願いします。

あとがき：年報 No. 12 をお届けします。厳しい社会状況の中、皆様のご協力のお陰で色々な行事を開催させて頂き、ご参加の方々からご好評を頂きました。これからも出版やホームページの一層の充実も含めて幅広い活動を続けたいと願っています。よろしくご支援の程お願い申し上げます。(KH)